

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：34304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K17858

研究課題名（和文）やくざ映画の分析を通じた戦後日本社会における男性イメージの変化の考察

研究課題名（英文）A Study of the Changing Image of Men in Postwar Japanese Society through the Analysis of Yakuza Films

研究代表者

東 園子 (AZUMA, Sonoko)

京都産業大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：40581301

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1960年代から1970年代のやくざ映画におけるジェンダー描写の変化の分析を通して、女性の支配や暴力を伴わない男性性を模索した。やくざ映画は、家庭の団欒の対極にあるジャンルとして、戦後社会に戸惑い疑問を抱く男性たちを惹きつけることができたと考えられる。1960年代は義理が絡む男同士の関係と人情を象徴する女性との関係の間で集団と個人の葛藤を描きつつ、義理が優先された。それが1970年代には、欲望や自由が義理や人情に妨げられる葛藤になる。男性が人情を受け入れることで新たな男性性が成立する可能性がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、自由と欲望を妨げるものとして旧来の「男らしさ」を否定する、従来指摘されたものとは異なる形での脱男性化を示した。また、女性の支配や暴力を伴わない男性性は男性が人情を受け入れることによって可能になるのではないかという、ケアする男性性（caring masculinity）概念に通じる点を見出した。これらは今後の男性性研究に貢献する。また、男性支配社会において、女性は異なる行動原理を持ち込むものとして排除されようとするという本研究の知見は、女性差別を解明するジェンダー研究等に生かすことができるだろう。

研究成果の概要（英文）：By analyzing the changing representation of gender in yakuza (Japanese gangster) films from the 1960s to the 1970s, this study explores a form of masculinity that neither dominates nor involves violence against women. As an antithesis to domestic bliss, yakuza films appealed to men disoriented by and skeptical of postwar social norms. The narratives of the yakuza genre of the 1960s depicted the conflict between collective loyalty and personal feelings in relationships between men who were governed by duty (giri) and women who symbolized humanity (ninjo), with duty ultimately taking precedence. In the yakuza films of the 1970s, this conflict takes the form of desire and freedom being thwarted by duty and humanity. A new kind of masculinity could emerge if men embraced humanity.

研究分野：社会学

キーワード：ジェンダー 男性性 男同士の絆 やくざ映画 日本映画 戦後社会

## 1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後の日本社会においては、男性が目指すべきあり方として、「男は仕事、女は家庭」という近代型性別役割分業に基づいた、一家の家計を支える「サラリーマン」がモデルの「稼ぎ手役割的男性性」が影響力を持ってきたことが指摘されている(天野正子「〈総論〉「男であること」の戦後史」『「男らしさ」の現代史』日本経済評論社(2006)・江原由美子「社会変動と男性性」『揺らぐ男性のジェンダー意識』(新曜社・2012))。だが、男性でも非正規雇用が増加し、共働き家庭が一般的になるなど、「一家の大黒柱」という旧来の男性イメージを実現できる男性は減少し、従来の「男らしさ」は行き詰まりを見せているといえるだろう。

そのことは、男性のみならず女性にとっても大きな問題になりうる。男性性をめぐる男性のアイデンティティ不安は、女性の心身への暴力的な行為に向かうこともあるからである。これまでの男性学・男性性研究やDV研究等で、男性がふるう暴力は男性性と密接な関係にあることが指摘されてきた。女性に対する男性の暴力は、「一家の大黒柱」に代わる形で「男らしさ」を達成しようとする手段となっている場合も少なくないのではないかと考えられる。

だが、稼ぎ手役割的でも暴力的でもない男性性は想定しうるし、男性の暴力性は必ず女性に向かうとも限らない。女性の支配や暴力を伴わない男性性はいかなる条件の下で成立するのかを検討する必要があると考えた。

## 2. 研究の目的

男性性と暴力の関係を考えるための素材として注目したのがやくざ映画である。やくざ映画は、1960年代に任侠の世界を描いて男性から絶大な人気を得て、1970年代には実在のやくざを題材にした「実録路線」が一世を風靡した。その後、劇場公開作品は減少したが、ビデオ作品は多数製作され根強い支持がある。「殴り込み」等の暴力場面を見せ場とするやくざ映画は、男性の暴力性を描き続けてきたジャンルといえるだろう。だが、やくざ映画を女性への暴力という点から見ると大きな変化がある。任侠路線の代表的なやくざ映画では主人公たちが女性に暴力的な態度を取ることはなかったが、実録路線以降、女性に対する暴力的な描写が増加する。この変化は、1970年代の「男らしさ」の変容(伊藤公雄「〈男らしさ〉と近・現代社会」『〈男らしさ〉のゆくえ』新曜社(1993))と連動していると考えられる。やくざ映画の変化を追うことで、男性の暴力性がいかに女性への暴力に結びつくのかを明らかにできるのではないかと考えた。

やくざ映画は「男になること」にこだわるジャンルだが(斉藤綾子「高倉健の曖昧な身体」『男たちの絆、アジア映画』平凡社(2004))、そこで目指される「男」は「サラリーマン」ではない。やくざ映画は、当時急速に普及したテレビでは難しい暴力描写等を売りにする「裏のメディア」として始まった(高井昌吏「任侠映画」と『あしたのジョー』『メディア文化を社会学する』世界思想社(2009))。やくざ映画が描く男性性は、高度経済成長期に増加した「サラリーマン」という「表」の男性性に対する「裏」の男性性といえるだろう。本研究の目的は、1960年代から1970年代にかけてのやくざ映画におけるジェンダー描写の変化を分析することを通して、戦後の日本社会における、暴力性を包含した「裏」の男性イメージの変容を考察することである。

## 3. 研究の方法

本研究ではドキュメント分析を行った。分析対象とする資料は大きく4つに分けられる。一つ目が、やくざ映画を牽引した東映製作のものを中心としたやくざ映画作品である。主に作中での男性・女性の描かれ方に注目しながら内容を質的に分析することが本研究の軸になっている。二つ目が、やくざ映画のポスターやプレスシート等の宣伝印刷物である。ポスターの図柄や惹句、宣伝ポイント等から、映画会社がやくざ映画をどのようなものとして提示しているのかを質的に分析した。三つ目が、研究対象時期の映画雑誌である。やくざ映画に関する記事や当時の映画産業の状況が書かれた記事を中心に収集し、やくざ映画が製作された背景や、やくざ映画の評価等を分析した。四つ目が、やくざ映画の監督等の関係者が書いた書籍や、やくざ映画に関する文献である。これらもやくざ映画の背景や評価等を知るための資料とした。

## 4. 研究成果

1960年代からやくざ映画が量産された背景には、日本映画を取り巻く環境の変化がある。日本映画はテレビの普及等によって急激な観客減少に見舞われ、特に女性客と子ども客の落ち込みが激しかった。そのため、当時の映画産業を寡占していた企業の一つ、東映は、成人男性をターゲットにやくざ映画を継続的に製作することにした。東映やくざ映画の主な客層は、下町や地方都市のブルーカラー男性や若い男性たちで、特に週末に行われた深夜興行で人気があった。

やくざ映画が人気を博した時代は、工業中心の社会に変わり経済力が重視される高度経済成長期の負の側面が意識されだした時代と考えられる。戦後社会への異議申し立てを行うような

社会運動も盛んになり、その担い手にはやくざ映画の支持者も多かった。やくざ映画は「表のメディア」であるテレビが象徴する、戦後社会の中心的な担い手であるホワイトカラーのサラリーマンの家庭の団欒の対極にある「裏のメディア」と位置付けることができる。

1960年代のやくざ映画（以下、任侠映画）で中心的だったのは、近代化・産業化が進行する明治期～昭和戦前期の社会を生きる近代やくざを描いた作品である。戦後を舞台にした作品でも主人公は昔気質のやくざとされており、近代やくざの延長線上にあると見なすことができる。任侠映画の主人公は、義理と人情を重んじ、弱きを助け強きをくじく任侠精神を体現する男性であるのが基本である。任侠映画は、庶民の味方である善玉やくざの主人公が、人々をいたぶる悪玉やくざの迫害に耐え、最後は悪玉やくざを倒して逮捕に至るといふ、自己犠牲的な勧善懲悪の物語が定番のパターンである。善玉やくざは古くからの慣習に従い和風の表象を伴う。他方、悪玉やくざは合理性を重んじ洋風の表象を伴う。任侠映画は伝統的慣習と近代合理主義の相克を描くものと捉えることができる。慣習的な価値観を重視する任侠映画は、民主主義の名のもと、近代化・産業化がいつそう進む戦後社会に戸惑い、疑問を抱く男性たちを惹きつけたと考えられる。

任侠映画において、「男」は立派な一人前の人間であることを示し、自らの行為によって「なる」ものとされ、しばしば男同士の関係の中で達成される。任侠映画の中で築かれる男同士の関係は、やくざ社会の義理が関わる。他方、女性は人情を象徴する存在として位置づけられ、女性との恋愛関係を通して義理と人情の葛藤が描かれる。任侠映画では、命を賭して殴り込みに向かおうとする男性を恋仲の女性が涙ながらに引き留めようとするも、男性がそれを振り切るという場面が定番化しているが、これは人情に対する義理の優位性を示すものといえる。

イブ・コゾフスキー・セジウィックは、近代イギリス文学において、男同士の社会的な絆であるホモソーシャルな関係にはミソジニー（女性嫌悪）とホモフォビア（同性愛嫌悪）が伴うことを指摘した（『男同士の絆』名古屋大学出版会（1985=2001））。任侠映画におけるホモフォビアとしては、現代を舞台にした監獄もので、「女らしい」ふるまいをする囚人が男性に性的関心に向けた際に周囲から否定的な発言が出ることがある。だが、それによって囚人仲間の輪から排斥されることはない。任侠映画の主流である戦前期が舞台の作品にはホモフォビクな描写は見出せなかった。エロスが漂う濃厚な男同士の親密性が描かれることもあるが、二人で組の敵に殴り込みに行くことでやくざ社会の秩序の中に位置づけられる。任侠映画では、すべてを義理に回収することで、男同士の同性愛的とも見なせる表現が可能になっていると考えられる。他方、ミソジニーに関しては、善玉側の登場人物が女性蔑視的な発言をすることはあまりなく、女性を否定的に描く描写もさほどないが、やくざ社会からは親分の妻以外の女性が排除されている。

男性が社会的な権力の多くを独占している男性支配社会において、男女とも権力や利益に近づくためには男性と関係を結ぶ必要がある。そのため、男性は男同士のホモソーシャルな関係を、女性は異性愛関係を重んじる傾向がある。この2つの関係が任侠映画では義理と人情に対応している。女性は社会的に人情を重視するよう促されているため、義理を重視する男性とは異なる行動原理で動く可能性がある。また、男性も女性と恋愛をすることで、やくざの掟や組の利益よりも女性を優先して行動する危険性がある。そのためにやくざ社会の内側から女性が排除されようとするのが、任侠映画から見て取れる。

任侠映画で描かれる義理と人情の葛藤は、集団と個人との間の葛藤と見ることもできる。任侠映画ジャンルが発展してくるにつれ、集団のために個人の意思や感情が切り捨てられるやくざ社会への批判も描かれるようになるが、任侠映画の客足が落ちた時期に登場した1970年代の実録路線（以下、実録やくざ映画）では、集団と個人との間の葛藤が異なる形で展開される。

実録やくざ映画は、上映時に近い戦後の社会を舞台にしており、利益のためなら手段を選ばない現代やくざの姿が描かれる。その嚆矢となった『仁義なき戦い』のタイトルが端的に示すように、義理と人情は古臭いものとして軽んじられる。実録やくざ映画で男たちが追求するのは、個人の欲望と、それを追い求めることのできる自由である。義理と人情は自由と欲望を妨げる足枷として描かれ、「男になる」こともその一部となる。やくざ映画では、先述の伊藤公雄が指摘するフェミニン化という面での脱男性化は見られないが、旧来の「男らしさ」を煩わしいものとして否定するという意味では、脱男性化の風潮と軌を一にする面が見出せる。任侠映画において「男になる」ことを可能にさせた男同士の関係は、実録やくざ映画ではしばしば挫折させられる。また、主人公の男性と恋仲になるヒロイン的存在が登場することも減る。義理と人情を忌避する作品において、主人公は義理が絡む男同士の絆や人情が絡む男女の絆から遠ざけられおり、孤独である。

また、実録やくざ映画においては、性暴力がしばしば描かれ、女性登場人物が否定的に描写されるなどミソジニックな要素が増える。男女の恋愛が取りあげられる際も、相手の女性と強引に性的関係を持つようとする場面がしばしば登場する。これらは、やくざ映画の中で女性が象徴してきた人情への恐れを表れとも解釈できる。人情は、任侠映画においては義理＝集団の掟・利益よりも優先できないものとされ、実録やくざ映画においては自由や欲望を妨げるものとして描かれた。本研究を通して、女性の支配や暴力を伴わない男性性は、男性が「人情」と向き合い、受け入れることによって可能になるのではないかと考えることができる。これは、近年の男性性研究でしばしば用いられるケアする男性性（caring masculinity）概念に通じるところがあるだろう。やくざ映画における「人情」が意味するものをより精緻に突き詰めることは、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 東 園子
2. 発表標題 やくざ映画ジャンルの形成
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 東 園子
2. 発表標題 やくざ映画におけるジェンダー・イメージ
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2018年度秋季研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東 園子
2. 発表標題 戦後日本社会における男の友愛コードの変化 『昭和残侠传』と『仁義なき戦い』を事例として
3. 学会等名 第90回日本社会学会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中東子（編）、竹田恵子、上村陽子、中條千晴、中村香住、東園子、有國明弘、渡辺明日香、村上潔、梁・永山聡子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 194
3. 書名 ガールズ・メディア・スタディーズ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------